

演題 11. 岩手医科大学歯科麻酔科外来における有病者の  
臨床統計的観察

○佐藤 裕, 久慈 昭慶, 佐藤 雅仁  
坂本 望, 佐野 滋子, 伊藤 真紀  
小野 尚子, 兼平亜希子, 城 茂治

岩手医科大学歯科麻酔学講座

近年, 歯科麻酔学の発達に伴い, 従来歯科治療が困難と考えられていた有病者に対しても, 積極的に歯科治療が行われるようになってきた。

今回我々は, 歯科麻酔外来患者のなかで, 有病者歯科患者について, その特徴を検討し, 今後の動向を推測することを目的として, 当科開設から平成7年8月までの6年2か月間における外来症例について, 統計的観察をおこなった。

当科外来患者のなかで, 有病者歯科患者の占める割合は, 全体の64%を占め, 次いで障害者歯科23%, ペインクリニック13%であった。

外来受診症例数は年次的に増加しており, 平成6年には, 総症例数は665例で, このうち有病者歯科症例は, 199例であった。

有病者患者の問題点別分類では, 最も多い症例は循環器系疾患の合併患者で, 次ぎが侵襲の大きい手術症例で当科が全身管理を依頼された症例であった。

以下, 歯科恐怖症, 低年齢で管理が困難な患者, 免疫疾患, 脳血管疾患, 代謝疾患と続いた。

全身疾患を合併した患者を対象に合併疾患の数による患者の割合をみると, 合併疾患が単一の患者は50%, 合併疾患が2つの患者は26%, 3つは15%, 4つ以上は9%であった。

有病者歯科患者の年齢構成は, 生後1か月から91才まで幅広く分布していた。

また年齢が上がるに従い, 全身疾患合併患者の占める割合が高くなっていった。

有病者歯科患者の治療に際しての管理法は静脈内鎮静法が最も多く用いられた。

当科有病者歯科に特徴的なことは, 受診者数が年次的に増加していること, 取り扱われた症例, 疾患が多岐にわたり, 幅広い年齢層の患者の管理が必要であったことである。

また, 全身疾患合併患者では複数の疾患を合併している症例も多く, 今後, より慎重な管理が必要と思われる。

特別講演

骨組織の細胞生物学的最近の知見

小澤 英浩

新潟大学歯学部口腔解剖学第一講座

骨組織は, アスピジンとして知られているおよそ3億年前に棲息していた甲冑魚の外骨格にその起源が求められる。これらの骨の系統発生は海から陸への動物の進化と密接しており, 陸上生活に対応するために加重された体重を支持し, 運動をより活発にするための運動器として, また海中に豊富なカルシウムを陸上で常に補充するためのカルシウム貯蔵庫として, さらに造血の場を提供している生体にとって必要不可欠な組織として現在に至っている。カルシウム調節ホルモンも生物をとりまく環境の変化, 特にカルシウムの変動に呼応して, カルシトニン, ビタミンD, 副甲状腺ホルモンの分泌と順次変化し現在に及んでいることは興味深い。このような特徴を持つ骨組織は常に古い骨と新しい骨が入れ替わっており, そこには骨吸収と骨形成の連携機構が存在する。

骨組織には間葉系骨原性細胞由来の骨形成系細胞である骨芽細胞と, 造血幹細胞に由来し, 骨吸収を営む破骨細胞, ならびにメカニカルストレスをはじめ骨基質の代謝維持に関与する, 骨芽細胞由来の骨細胞などがみられる。骨芽細胞ならびにその前駆細胞は石灰化や骨形成だけではなく, 破骨細胞の分化, 活性化の調整役としても作用し, さらに骨細胞と共同して骨基質の代謝維持, ミネラルのホメオステシスにおける関門としての機能も果たしている。一方, 破骨細胞は骨組織を吸収しそこに新たな骨形成を誘導する骨改造機構の中心的役割を果たしている。これら骨の細胞群は, 相互に関連して機能しており, そこには特徴的な細胞間, 細胞基質間の接着構造が認められる。骨の代謝は, 主としてこれら「骨の細胞」により骨形成と骨吸収を中心にダイナミックに展開されているが, それらは各種のホルモン, サイトカインや神経などにより複雑に調節されている。

ここでは骨の基本的組織像と骨改造機構について超微細構造を中心に細胞生物学的な解説を行うとともに, 骨吸収抑制や骨誘導と関連する各種物質による破骨細胞の形態変化や骨形成などにつき, 幾つかの実験所見についても供覧した。